

柴野栗山の旅と作品

柴野栗山（元文元年一七三六、文化四年一八〇七、享年七二）は、合田・増田の両氏に次いで、阿波藩儒の世家柴野氏を開いた人物である。藩儒柴野氏は栗山を初代とし、二代碧海がこれに継ぎ、三代竹斎に至って明治維新を迎えた。栗山は五二歳までの前半生は阿波藩儒として、それ以後の後半生は徳川幕府の儒官として、近世日本の漢学史上に偉大な足跡をとどめている。本稿はその生涯の中から三つの旅行とこれに伴う作品を取りあげて論述し、彼の伝記および詩文の研究に資したいと思う。

栗山の経歴については、養嗣子碧海が作った詳細な「年譜」が残っている（駒井乗郵『鶯宿雜記』別録第一五巻取、碧海「柴野家世紀聞」に附す。国立国会図書館蔵、写本。これによつて彼のごく大まかな履歴を示せば、次のごとくである。

元文元年（一七三六、一歳） 讃岐国三木郡牟礼村宗時（現在木田郡牟礼町内）に生まる。

宝暦三年（一七五三、一八歳） 五月、江戸に出て昌平黌に入学し、以後一二年間在学す。

明和二年（一七六五、三〇歳） 九月、京都に上り高橋宗直（図南

に就いて、国学（主として本朝の故実・典礼）を学ぶ。

同四年（一七六七、三三歳） 八月、阿波藩儒に任ぜられ、以後二〇年間に在職す。十月、徳島に赴任す。

同五年（一七六八、三三歳） 七月、世子治昭の侍読として江戸に勤務し、足かけ四年に在勤す。

同八年（一七七一、三六歳） 十一月、休暇を賜り、京都に居住し、塾生を教う。以後足かけ六年在京。

安永三年（一七七四、三九歳） 三月、帰省旅行をし、「進学三喻」の文を作る。

同五年（一七七六、四二歳） 九月、公子喜和の侍読として江戸に勤務し、足かけ五年に在勤す。

同九年（一七八〇、四五歳） 三月、休暇を賜り、京都に帰つて塾生教育に従う。以後足かけ一三年在京す。

天明七年（一七八七、五二歳） 秋、升幕の命下り、二月二六日京都を發して江戸に向う。

同八年（一七八八、五三歳） 正月元日、天竜川を渡り、同八日江戸到着、幕府儒員・昌平黌教官に任ぜらる。

竹 治 貞 夫

寛政四年（一七九二、五七歳）一〇月、賢聖障子の張設御用、

および京都・近畿の寺社の古文書・宝物調査御用のため、

三日に江戸を発して上京し、一二月二八日帰着す。

寛政九年（一七九七、六二歳）一〇月、西丸奥儒者を命ぜられ、

將軍世子（家慶）に侍講す。

文化四年（一八〇七、七二歳）五月七日江戸を発して天橋立・

城崎温泉に遊行浴湯し、七月二三日帰着す。一〇月臥病、

一二月一日未の刻卒す。

右の略歴によってもわかるように、栗山は讃岐・阿波・京都・江戸の間を、一生のうちにも何度も往来しているので、彼にとって旅は格別珍しいことではない。しかしそれらの旅は、主として赴任・帰休等を目的とする事務的な往復に過ぎず、遊覧・觀光などの内容を帯びてまとまった量の詩文を残した旅行は、まれであったようである。以下の三つの旅は、そのまれな例に属するものと言えるであろう。

（一）「進学三諭」の旅

栗山の郷里は讃岐の牟礼で、現在の栗山記念館はその生家跡である。すぐ北には八栗山（即ち五剣山）がそびえ、西方にはま近く源平古戦場の屋島が横たわっている。「年譜」によると、栗山は一八歳の時江戸の昌平黌に入学して以後、二六歳・三三歳・三九歳・四三歳・四六歳・五〇歳・五一歳の七度にわたって、この郷里に帰っている。四回までは父僕翁の生前の帰省であり、五回目（四六歳）は父の病と死による帰国である。六回目

は墓所の整備のためであり、最後は弟貞毅の死とその後事を治めるためであった。

栗山は荻生徂徠が唱導して以来広く流行していた、明代古文辞の晦渋な弊風を排し、唐宋古文の正道を学んで、達意明暢の文章に一変させた江戸後期の文豪であるが、その代表作の一方で「進学三諭」の構想を得たのは、三九歳のとき三回目の帰省をした途次であった。その文の序に、

甲午の春、予は親を南国に省す。未だ撰播の勝概を知らざるを以て、因りて以て之を窮めんと欲し、乃ち陸路もて直ちに室津に赴く。中路に偶たま感有り、進学の方を得たり。

書して以て自ら警め、且つ以て二三の友人に諭す。三則。と言う。甲午即ち安永三年（一七七四）の春、当時京住みの阿波藩儒であった栗山は、帰省の旅に觀光目的を加え、通常淀川から瀬戸内海を航する船旅を陸路に変えて、室津の港（兵庫県揖保郡御津町）まで歩くことにしたのである。

「諭」とは比喻を用いて道理をさすとす文体の名で、栗山が韓愈と共に最も重んじた蘇軾の文集の「雜説」中に「日諭説」があり、『唐宋八家文』にも「日諭」と題して採られている。栗山の第一諭は、京都の南郊、西山の吉峰寺（京都市西京区大原野小塩町）に至る間に得たものである。丁度この日は寺の本尊千手観音の御開帳法会があり、街道には参詣の人の群がひっきりなしに続いていった。栗山はこれらの人々と道連れになつて歩くのであるが、「但だ予は前途遼遠なるを以て、心遽脚忙、近郊の遊人と差馳^ち逍遙すること能はず」、一人と話しだして話し終らぬ

うちに前の人と語るといった具合で、しばらくして振り返ると最初の人はもう顔の見分けもつかない程隔たっていた。

こうして半日過ぎ、十日もたてば、もはや遅れた人が追いつくことは不可能である。私は元来足弱であるのに、このように人々を追い越してきたのはなぜであろうか。「此れ他無し。彼の期する所は十数里の内に在り、故に其の心怠るなり。吾の期する所は数百里の外に在り、故に其の心勤むるなり。我是に於て学の方を睥れり。請ふ諸君、数百里の外に期して、一步の功を忽にすること無くんば可なり。」

第二喻は、勝尾寺(箕面市粟生間谷)から箕面の滝に越える山道で迷い、旅程をすっかり狂わせてしまったことから得たものである。大阪に向う街道を茨木まで南下した栗山は、西方に向きを変えて今の箕面市の山地に入り、西国第二十三番の札所勝尾寺に詣で、更に箕面の滝に向って山を越えて行こうとした。

ところが寺の門から新旧の二道が通じており、旧道は低く谷の中に入つて草木に蔽われ、新道は広く平らかである。折から箕面に赴く二人の商人が丁稚を連れて通りかかり、先頭の丁稚はさつさと平坦な新道を進んで行く。通り慣れているものと思つて栗山も後について行つたが、平坦な道はやがて尽きて細道となり、ついには険しいいばらのジャングルとなった。そこで商人に問えば箕面越えは初めてであると言ひ、引き返そうとした。しかし栗山はこんなに遠くまで来て引き返すのは無理であるとし、「山行道を失へば、当に水に沿ひて下るべし」という教えを思い出し、微かな谷川の音を頼りに草木をかき分けて下り、

やつと正路にたどりつくことができた。こうして今日は兵庫の駅まで行こうと思つていたのに、はるか手前の西宮で日が暮れてしまった。学問も同じである。「学誤りて正路を失へば、則ち能く遠からずして復ると雖も、亦一日迷へば則ち後來の造詣必ず一日の未だ達せざる有り。一年迷へば、則ち其の造詣亦必ず一年の達せざる有らん。諸君請ふ、務めて古人の由る所に従ひ、軽俊快意の言の誤る所と為ること無くんば可なり。」

第三喻は険しい摩耶山(神戸市灘区)の頂上に登り、その絶景を賞することによつて得たものである。西宮駅を出発して西に向うと、やがて右前方の雲の上に海拔七〇二メートルの摩耶山がそびえている。昨日の妄行に疲れて、登山がためらわれたが、供の下僕に励まされて、山麓の茶店まで登つてきた。「既に浜海の地より高きこと數十丈、海を隔てて東のかた撰・泉二州に平臨す」。ここでの眺望に満足した栗山は、再び登頂をためらつたが、下僕が奮然として登り出したので決心して後に従つた。

頂上には摩耶夫人を祭つた切利天上寺があり、現在はケーブルからロープウェイへと続いて容易に登れるが、山道は峻険を極めて「趾を挙ぐること帯よりも高く、行くこと数折にして氣息喘々、喉間声を成す。汗は背面に流く、鼻尖滴を成し、率ね数十歩なる能はざるに輒ち佇立して相顧みる」といった具合であつた。しかし層頂からの眺望は、まさしく生死を忘れた楽地の境界である。「向に余をして険を怯れ勞を憚り中道にして廢せ使めば、則ち安んぞ此の忘死の樂しみを享くることを得んや。故に能く一層の勞に勝ふる者は能く一層の樂しみを享け、

能く百層千層の勞に勇む者は能く千百層の樂地に造る。其の困しむ所は、即ち其の樂しむ所の地か。諸君其れ十数年の勞困を怯れ憚りて、終身の樂地を失ふこと無くんば可なり。」

以上が栗山三九歳の時の、帰省の旅で得た「進学三諭」の文のあらましである。生々しい体験を比喩とし、極めて明快に学を進める法を説き示し、門生をはじめ世の学徒を感奮させるに足る妙文である。「家世紀聞」によれば、栗山は「文に於ては韓(退之)・蘇(東坡)を喜び、少年の時手写の韓文一部あり」といい、「文の力を得るは、全く韓・蘇に在り」という。韓退之の文集は「雜著」の類を最初に置くが、「栗山文集」もこれに倣ったものか卷一に「雜著」の文を集め、その第一に「進学三諭」を載せている。栗山の文の代表作の一である。

(二) 寺社宝物調査の旅

栗山の生涯における特殊な旅の第二は、寛政四年(一七九二、五七歳)の冬幕命を受けて上京し、京都・奈良の二都および近畿の寺社の宝物を調査し、写し取って廻った旅である。これより先、天明八年(一七八八)の大火で焼失した皇居は、幕府側から栗山も参画し古制にのっとった新築が寛政二年(一七九〇)に落成した。栗山は特に紫宸殿の賢聖障子の画像復原に苦心し、「賢聖障子名臣冠服考証」(写本二卷、内閣文庫蔵)を著しているが、この年一〇月その画像(住吉広行画)が成り、その張設を督することが今度の上京の第一の目的であった。その事が終わった一一月、寺社を廻って宝物の調査写取の仕事を始めたのである。栗

山と画員住吉広行の共編に成る、「寺社宝物展覧目録」(写本五卷、内閣文庫 国会図書館等蔵)が今日残っている。一二月二八日江戸に帰ってから、幕府に献上したこの時の古書画器物碑等の模本摸図は、後に松平定信が編した『集古十種』(寛政二年の序がある)の資料となった。

この旅行中に栗山が詠じた詩は一七首を数え、制作時期のわかる一連の作品群としては詩集中最も多い。栗山の詩集には明治三九年に中川黙堂が刊行した「栗山堂詩集」二巻と、広島市立中央図書館浅野文庫その他に蔵する写本「栗山堂詩集」四巻があるが、いずれもその内容は作品の雜然たる集積で、作られた年時は明らかにされていない。従って「栗山堂詩集」だけはこの旅行中の作品であることを確認するのは困難であるが、幸いこの旅の江戸出発(一〇月九日)から同帰着(一二月二八日)まで、終始栗山と行を共にした屋代弘賢が、詳細な日記「道の幸」上中下三巻(内閣文庫蔵写本、また「存採叢書」第五四冊収活字本)を残しており、その中に栗山の作詩も目を追うて記されている。弘賢は国学・筆道を修めて幕府に仕え、本丸付の書役となり、この時栗山の助手として随行し、古書旧記の調査に当たった。彼は翌寛政五年、幕府の右筆に任ぜられている。

さて一七首の作品中、東海道途上の作が一四首を占める。以下弘賢の「道の幸」に拠って知られる制作順に、掲げることにしてしよう。

(1) 函関 一〇月二一日

豈謂長纓繫越才 豈に謂はんや長纓越を繫ぐの才ありと、

童心妄意棄繻來 童心妄意繻を棄て来る。

童鍾衰朽君休咲 童鍾たる衰朽君咲ふを休めよ、

亦此主恩賜伝回 亦此れ主恩伝を賜ひて回る。

昔一八歳の時、昌平齋入学のため初めて東遊して箱根の間を越えたことを思い出し、今幕府の使者として西に還る感慨を、漢の終軍の故事に託して詠じている。「漢書」終軍伝に、「軍曰く丈夫西游す、終に復た伝還せずと。繻を棄てて去る」と。また「願はくは長纓を受け、必ず南越王を羈いで之を闕下に致さん」と見える。繻も伝もともに関所手形の名である。学者栗山の故事を用いた難解作の一例と言えよう。

(2) 湖水 同日

十里青山頂 十里青山の頂、

平湖在半空 平湖半空に在り。

晴光接河漢 晴光河漢に接し、

倒影挿芙蓉 倒影芙蓉を挿す。

常著双飛鶴 常に著く双飛の鶴、

恐葳独角竜 恐らくは葳せん独角の竜。

幾回来旅館 幾回か旅館に來り、

俯檻照心胸 檻に俯して心胸を照らす。

箱根芦の湖の景である。逆さ富士の影を詠じた第四句の「挿」を「涵」に作るものは初案で、平三連の禁を犯す。

(3) 浮島道中 一〇月一二日

浮島幾転青松道 浮島幾転す青松の道、

尽日每随富岳回 尽日毎に富岳に随つて回る。

巔雲在前墟手掬 巔雲前に在りて手掬するに堪へ、

麓雲著背送人來 麓雲背に著きて人を送り来る。

浮島が原は沼津市と富士市の間にあつた海岸湿地帯。第二句の「随富岳」は、或は「随」を「將」に「岳」を「麓」に作る。

(4) 其二 同日

林間雲表常々見 林間雲表常々見る、

恰似美人翳袖扇 恰も似たり美人の袖扇を翳すに。

林幄雲屏皆徹却 林幄雲屏皆徹却し、

咲容此日靚嬌面 咲容此の日嬌面を靚る。

『道の幸』によれば、この日初め曇つて富士は全く見えなかつたが、やがて雲の絶えまに少し見え、吉原に至る頃は山の姿

が残りなく見えるようになったという。第四句の「靚」を或は「親」に作る。なお『道の幸』はこの一首を欠く。

(5) 宇都嶺 一〇月一三日

静岡市の西、丸子の宿から岡部の宿に越える宇津の谷峠である。この詩（七言絶句）平仄の整わない拗体である。今省く。

(6) 荒井関、奉謝吉田侯賜船（荒井の関にて、吉田侯の船を賜ふを謝し奉る） 一〇月一五日

桂橈蘭柵湖濱 桂橈蘭柵湖濱に儀す、

道是雄藩籠錫分 道ふ是れ雄藩籠錫の分と。

抱日海霞波底錦 日を抱く海霞は波底の錦、

挿天岳雪鏡中雲 天に挿する岳雪は鏡中の雲。

盪搖影逐淵鱗舞 盪搖の影は淵鱗を逐うて舞ひ、

歎乃声兼汀鳥聞 歎乃の声は汀鳥と兼に聞く。

豈特仁風被行旅 豈特り仁風の行旅に被るのみならんや、
濟川事業本推君 濟川の事業は本と君を推す。

舞坂より浜名湖を渡つて荒井の関（静岡県浜名郡新居町）に至る。湖上一里半、「道の幸」に「邦彦ぬしは吉田侍従殿より御もてなして、堅固なる舟にてわたられぬ」とある。吉田（豊橋）藩主松平信明は老中を勤め、栗山と親しかった。「濟川」は「書経」説命上の「若し巨川を濟らば、汝を用て舟楫と作さん」の句より出て、君主輔佐の任を指す。

(7) 三河道中 一〇月一六日

神祖梳風浴雨途 神祖梳風浴雨の途、

山河四塞見雄図 山河四塞して雄図を見る。

書生報国無涓滴 書生の報国涓滴も無し、

俯愧肩輿役駅夫 俯して愧づ肩輿駅夫を役するを。

家康公の創業の労苦を敬仰し、わが身の無為を恥じている。

(8) 無題 一〇月一七日

欲及紅楓入旧郷 紅楓に及んで旧郷に入らんと欲し、

暁行不厭履嚴霜 暁行厭はず嚴霜を履むを。

為報小倉風葉道 為に報ず小倉風葉の道、

留作婦人昼錦装 留まりて婦人昼錦の装ひと作れ。

岡崎の西郊にある矢作の橋を早朝霜を踏んで渡り、京都の小倉山の紅葉に間に合うことを願った作。「衣錦還郷」（「南史」柳慶遠伝）・「衣錦昼行」（「魏志」張既伝）の語を踏まえる。

(9) 題佐夜駅主人屏画（佐夜駅の主人の屏画に題す） 一〇

月一八日

十月未応春意催 十月未だ応に春意催すべからず、
入門忽怪暗香来 門に入れば忽ち怪しむ暗香の来るを。

石辺籬下尋将去 石辺籬下尋將し去り、

屏上初逢梅嶺梅 屏上初めて逢ふ梅嶺の梅。

宮宿から船で桑名に渡らず、佐屋路を廻り、佐屋宿（愛知県海部郡佐屋町）の本陣に入つて昼食をとつた。「道の幸」に「屏風に梅嶺、源元孚といへるが氣がきし梅あり、邦彦ぬし筆とりて贊を題」したという。梅嶺は江西省大度嶺の別名で梅の名所。

(10) 尾張公賜樓船、下木曾川（尾張公樓船を賜ひ、木曾川

を下る） 同日

佐屋宿から桑名までは、船で木曾川を下つて行つた。「邦彦ぬしは尾張重相公のまうけさせ給とて、やかたつくれる船賜はりてのらる」と言い、弘賢等は別船であつた。詩は七言八句の律詩である。省略。

(11) 無題 同日

無才無徳老書生 才無く徳無き老書生、

王事靡盬祇役行 王事靡盬こと靡く祇役して行く。

恐被旧溪猿鶴吟 恐らくは旧溪の猿鶴に吟はれんことを、

路傍喝道且低声 路傍の喝道且らく声を低めよ。

『道の幸』に「幕府の御使なりとて、いづくにても国の守よりさきおはせけるほどに、邦彦ぬしとかしこまりたるけはひにて」という。「王事靡盬」は王命による仕事はおろそかにできぬ意で、詩経にしばしば見える。喝道は先払い。

(12) 鈴鹿関 一〇月二〇日

坂下照々鈴鹿陰 坂下は照々鈴鹿は陰る、

八十瀬川浅又深 八十瀬の川浅く又深し。

東西南北家何処 東西南北家何れの処ぞ、

去々来々幾歳心 去々来々幾歳の心。

「馬夫どもの、坂はてるてるとうたひつれて過るを、邦彦ぬし」と言い、屋代本は「坂下」を「坂也」に作る。八十瀬川は鈴鹿川の別名である。

(13) 其二 同日

頑翁頭白依旧頑 頑翁頭白く旧に依つて頑なり、

忽策青牛度碧山 忽ち青牛に策つて碧山を度る。

夾路兒童齊抵掌 路を夾む兒童齊しく掌を抵ち、

指道頑翁又入関 指さして道ふ頑翁又関に入ると。

「里の童部の邦彦ぬしを見しりたるにや、此おきな又来りぬといひければ」とある。栗山は四十一歳から五十七歳のこの年までに六回鈴鹿の関を通過している。

(14) 湖上 一〇月二一日

湖辺沙路淨無泥 湖辺の沙路淨くして泥無し、

柳渚松湾任馬蹄 柳渚松湾馬蹄に任す。

何怪鄉村語言好 何ぞ怪しまん鄉村語言の好きを、

皇州近在彩雲西 皇州は近く彩雲の西に在り。

琵琶湖畔で都は間近い。「けふ道にて賤がことばのやさしきをいぶかりつれば、邦彦ぬし」とあり、弘賢に答えた詩である。こうして東海道の風雅な旅を終え、一〇月二二日の午前京都に到着した。

京都で皇居の用務と寺社の調査を済ました栗山が、宇治・奈良および大和地方への調査の旅に出発したのは、十一月一七日であった。ここでは以下のような三首の詩をとどめる。

(15) 入南都(南都に入る) 十一月一九日

宇治を出て木津川の長堤を南下し、奈良坂を越えたとやがて奈良の都である。折から雪降り積もる道中の景と感慨を、五言律詩に詠じている。この詩は「道の幸」には欠く。今省略す。

(16) 神武陵 十一月二五日

遺陵纔問路人求 遺陵纔かに路人に問ひて求む、

半死孤松半畝丘 半死の孤松半畝の丘。

不有聖神開帝統 聖神帝統を開くこと有らずんば、

誰教品庶脱夷流 誰か品庶をして夷流を脱せ教めん。

廐王像設專金閣 廐王の像設は金閣を専らにし、

藤相墳塋層玉樓 藤相の墳塋は玉樓を層ぬ。

百代本枝麗不億 百代の本支麗億のみならず、

誰能此処一回頭 誰か能く此処にて一たび頭を回らさん。

この詩は後に度々推敲されたものと見え、諸本による詞句の異同が最も多いが、ここには寛政八年(一七九六)二月の栗山の書跡を刻した、栗山記念館の庭の詩碑に拠つた。廐王の句は聖徳太子の法隆寺、藤相の句は藤原鎌足(多武峰寺(談山神社)の莊麗を指す。第七句は「詩経」大雅・文王篇の「商の孫子、其の麗億のみならず」の語を取る。まことに懐古傷敗の深情が流露しており、栗山生涯の傑作と称するに足る。なお現在の神武陵が治定されたのは幕末の文久三年(一八六三)で、栗山の頃は

今の綏靖天皇陵が神武陵と呼ばれていた。

(17) 塔峰廟 一二月二六日

桜井市の南、標高六百メートル余の多武峰たぶたけの上にある藤原鎌足かみあしの廟、もと寺であったが明治二年に談山神社に改められた。

詩は五言一六句の排律で、鎌足の功業をたたえる。今回の旅行中の最長篇である。ここには省略する。

この後栗山等は初瀬を経て一二月一日奈良に、同八日に京都に帰ってそれぞれ更に調査を重ね、一六日京都発、二八日江戸着を以てこの旅を終えている。京畿大和の調査旅行に従った人員の中に、書跡模写の技に長じた阿波藩士森川宗次むらかわむねつぐがあった。栗山は彼の死後「森川宗次碑」(『栗山文集』巻四収)を作り、文中にこの旅の状を詳記して懐かしんでいる。徳島市南佐古六番町、大安寺墓地の東南隅に「森川宗次遺墨墳」が現存し、屋代弘賢の筆跡でこの碑文が刻まれている。

(三) 城崎浴湯の旅

栗山が七二歳の生涯を終えたのは、文化四年(一八〇七)一月一日であるが、この年五月七日から七月二三日に至る二か月半にわたって、但馬の城崎温泉に浴する長期の保養観光の旅をしている。これが栗山の生涯における特殊な旅の第三で、しかもその最大のものである。ただ旅中の「松江勝事」六首の中に、皆言老病因詩瘦 皆言ふ老病は詩瘦に因ると、不許此行一曲歌 此の行一曲をも歌ふを許さず。と詠ずることより見ると、従行者の養子碧海と門人二三順憲は、

詩作が高齢の栗山の疲労を増すのを恐れてこれを止めていたように、そのせいか大旅行にもかかわらずまとまった作品が乏しい。いま詩集・文集・碑石等に散在する作品を集めて、その大要を記してみよう。

碧海の「家世紀聞」に、「天橋の遊には翛然しゅうぜんとして自得し、喜び顔面に見はる。浴に在りて嘗て人に語りて曰く、『四十年前、先人此こゝに浴して帰り、語りて曰く、天橋の勝は実に尋常の比す可きに非ず。汝も亦試みに往きて一觀せよと。優遊して果さず、今日に到りて而して後遺教を奉ずるを得たり』」と云うのによれば、城崎への途上まず丹後の天橋立を見て、亡父のかつての勧めを果したことがわかる。『栗山堂詩集』には「与謝海」と題する五言律詩一首が見られる。

城崎およびその近郊における作品としては、まず

(1) 水明楼関係詩文

がある。水明楼は今の城崎駅の裏手、円山川の西岸にあった酒楼でもと臨川亭と称していたのを、栗山がここに遊んで杜甫の「四更山吐月、残夜水明楼」(四更山月を吐き、残夜水楼に明らかなり。『杜詩』詳註本卷一七「月」の句より取って水明楼と名づけ、高士清遊の名勝となった。栗山は「残夜」を「半夜」と改めて、「半夜水明楼」の扁額を書いて板に刻し、更に跋文を作つて裏面に刻した。栗山記念館にはその拓本を蔵しており、『栗山文集』巻六に「水明楼扁額跋」が収載されている。また栗山は

風零詠帰山吐月 雪に風し詠じて帰れば山月を吐き、
瀧響歌罷水揚瀾 響を濯すすひ歌ひ罷れば水瀾を揚ぐ。

の対聯を書いて主人に与えたが、のち碑に刻んで樓前に建てられた。今は城崎町東山公園の登り口に移建されている。水明樓上の唱和の作としては、「丹山翁の韻に和す」（七言絶句）と「西伯熙の韻に和す」（同）の二首があり、前者は『栗山堂詩集』に、後者は新居水竹の『諷詠日抄』に見える。新居水竹は阿波藩の儒家詩人で、天保一五年（一八四四）、二月改元して弘化元年八月城崎に遊び、栗山の足跡を尋ねてこの著を残した（徳島文理大学本部蔵『新居水竹文書』収。なお西伯熙は丹後の文人小西松江である。次に水明樓関係以外の、

(2) 城崎客舎における作品

として文一篇と詩二首がある。文は『栗山文集』巻六に「大石良雄書牘跋」と題し、『諷詠日抄』に「大石良雄父子及び其の内人の書牘卷首に書す」と題するもので、旅館の主人武谷氏の蔵する良雄等の手紙の表装横巻を見た感動を述べる。「日抄」は文末に「文化丁卯六月、書于大溪旅寓。征夷府待問儒員、柴邦彦」の署名まで写している。大溪は大溪川で、温泉街を流れる溪谷である。手紙はすべて大石良雄の妻の父、但馬豊岡藩家老石東源五兵衛宛のもので、かつては屏風の下張りにされていたものであった。

詩二首の一是「青山氏蔵する所の扁」と題する五言絶句で、『諷詠日抄』にのみ見える。二〇年前、栗山が青山氏に書いて与えた「訥齋」の扁額を再び見た感想を詠ずる。他の一是「桜子良が恵ま見る韻に和答す」と題する左のごとき七絶である。

到処逢迎老後栄　到る処の逢迎は老後の栄、

況君才性拔群清　況や君が才性は群を抜いて清きをや。

同流経術淵源在

同流の経術淵源在り、

不問可知湖学生

問はずして知る可し湖学生。

『栗山堂詩集』は活字本も写本もすべて「同流」を「風流」、「湖学」を「古学」に作るが、城崎で真跡を写したと思われる『諷詠日抄』には「同流」・「湖学」となっている。「湖学」とは宋の慶曆中、湖州教授となった胡瑗（安定先生）の学派の称で、辞賦が尊ばれた当時ひとり湖学派は経義と事務とを重んじ、多くの秀才を出したという。桜子良は出石藩儒桜井東門、名は惟温、字は子良（また土良に作る）のことである。祖の舟山・養父東亭と継承して、その学风は経義を重んずること湖学派のごとくであったので、異学の禁を断行し詩文偏重の護園派を排した栗山は「同流の経術」と言つて共鳴の意を示したのである。「風流」・「古学」とする「詩集」の形は、誤訛と考えられる。

(3) 玄武洞命名と鷹野浜題名碑

城崎の近郊に遊んだ栗山の足跡としては、まず玄武洞の命名がある。円山川の東岸、豊岡市赤石にある洞窟は、黒色六稜、亀甲状の節理を有する石柱が立ち並んで、すこぶる奇観を呈している。従来ただ石山と呼ばれていたのを、栗山は亀蛇の形をもつ北方神「玄武」を以てこれに名づけた。近代の玄武岩の学名がこれに由来することを思えば、栗山の命名の功を忘れることはできない。

六月十日、城崎西北郊の鷹野浜（城崎郡竹野町竹野浜）に遊んだ栗山は、日本海のはるか彼方、満洲女直（じよまき）を雲天の外に望み、

酒を把つて浩然、曠世の懐いがあった。この感慨を一行の姓名と共に刻して記念としたのが「鷹野浜題名碑」である。この碑は浜の西端、猫崎が突き出る根元の「奥城崎シーサイド」に現存し、栗山の睨満碑と呼ばれている。

(4) 松江勝事六首

城崎の東方に丹後の久美浜湾、一名松江の景勝地(京都府熊野郡久美浜町)がある。湾口には小天橋と呼ばれる約三キロの砂嘴が横たわり、日間の松原という白砂青松が続く。この湾に舟遊し、この地の雅人井上氏の聚景樓に二泊した栗山は、七絶六首(「詩集」と「玖美浜井上氏屋柱題名」の文(「諷詠日抄」)を残している。その「第二首」

此間応似富春灘

此の間応に富春灘に似たるべし、

七里松江六月寒

七里の松江六月寒し。

他日隱栖何処好

他日の隱栖何れの処か好き、

巖陰水曲再三看

巖陰水曲再三看る。

富春灘は浙江省桐廬県にあり、後漢の巖光が隱栖して釣りを垂れた名所である。「第二首」

一帶白沙横海門

一帶の白沙海門に横たはり、

北溟万里吐又吞

北溟万里吐いて又呑む。

回頭笑爾天橋立

頭を回らして笑ふ爾天の橋立、

三絶景中独捩尊

三絶景中独り尊に捩るを。

この詩は「諷詠日抄」所載の詞句に従った。「詩集」の文字の幾つかは適切でない。「第六首」

皆言老病因詩瘦

皆言ふ老病は詩瘦に因ると、

不許此行一曲歌 此の行一曲をも歌ふを許さず。

忽被仙靈相促挨 忽ち仙靈に相促挨せられ、

六詩掩口低声哦 六詩口を掩ひて低声に哦す。

李白が杜甫に戯れた詩に、「借問す別來太だ瘦生、総べて從前作。詩の苦の為なり」の句がある(唐・孟聚「本事詩」)、禁を破つて六詩を作つたのは、この地の景がよほど栗山の氣に入ったものと考えられる。

この旅の帰途、栗山は微恙を得てしばらく出石城下にとどまった。一日藩儒桜井東門の宅を訪ね、床上のみごとな盆石を見て賞愛やまず、東門もついにこれを割愛して贈つた。喜んだ栗山は、小西松江から送別にもらつた僧維明の画梅に次の詩を題し、お返しとした。

題維明梅贈桜士良(維明の梅に題して桜士良に贈る)

漫以陽春色 漫に陽春の色を以て、

博來暮山紫 博し來る暮山の紫。

西翁如見債 西翁如し債せ見るも、

同在烟光裡 同じく烟光の裡に在り。

唐の王勃の「滕王閣序」に、「烟光凝つて暮山紫なり」の句がある。この石は浅紫色で深山の趣があり、画梅と同じく陽春烟光中の物であるというのである。栗山は盆石を酷愛し、数十石を蓄えていたという(碧海「家世紀聞」)。その性癖を露呈した一首である。

本稿は平成四年十二月一日、栗山記念館で行つた講演に補筆したものである。(たけじ・さだお 本学名誉教授)